



TITLE:

静脩 Vol. 37 No. 1 (2000.5) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 37 No. 1 (2000.5) [全文]. 静脩 2000, 37(1)

ISSUE DATE:

2000-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66034>

RIGHT:



経済学部 of 古典文献に思う

経済学研究科教授 田中秀夫

昨年の秋に経済学部は創立80周年を迎え、記念式典を行うとともに、附属図書館で古典文献資料の記念展示も行った。展示は二部に分かれ、第一部で「経済学の系譜」、第二部で「和古書の挿し絵にみる生活風景」をサブ・テーマに掲げて、それぞれに興味を引きそうな文献等を展示した。幸い予想を遥かに越える多くの方が展示をご覧になり、関係者の労は報われ、企画は有意義だったように思っている。

40数万冊を超える経済学部図書室の蔵書のなかには、ビュッヒャー文庫、マイヤー文庫、上野文庫、河上肇文庫といったきわめて貴重な特殊文庫があることはよく知られている。そしてその中には、経済学とその他の重要な古典的文献が多数含まれていることも今ではよく知られている。

そうした古典文献から「経済学の系譜」を再構成すべく今回は90点ほどの書物を選んで展示したのだが、そのプロセスで改めて気づいたのは、大量の資料があるにもかかわらず、経済学に限っても重要な古典的文献の重要な版本が必ずしも系統的に収集できていないという事実である。経営学は経済学に比べても歴史が浅いが、それでも重要な古典的文献というものは存在するので、当初は経営学の古典も展示したいと思



っていた。ところが、予想以上に本がない。80年も経っているのに、経済学と経営学の古典的文献が揃っていないというのは、意外ではないだろうか。しかし、考えてみれば、それもそのはずだということに思い当たる。

というのは、図書室所蔵の古典文献の多くは寄贈されたものであって、図書室が系統的に買い集めたものが中心をなすのではないからである。

そもそも経済学部・経済学研究科が潤沢な図書費をもてるようになったのは、ごく最近のことにすぎない。そう言えば、二十数年前に、わたしの指導教官であった平井俊彦先生（原稿を書いている2月現在名古屋外国語大学副学長）が本が買えないと嘆いておられたのを思い出す。あの頃は紛争の後で、研究環境はボトムだったかもしれない。先生はようやく認められた多くも無い科学研究費で、わたしが読みたいと思っていた本を買って下さった。「田中君、欲しい本があったら遠慮せずに言いや。」

当時と比べると今は図書購入費は格段に多くなったに違いないが、それでも部局がまず優先

して購入するのは当面必要な研究書やジャーナルであって、古典文献の収集はどうしても後手になってしまう。しかも、研究書もジャーナルも幾何級数的に増加しているから、実は事態は深刻である。まして特別の予算枠でも無い限り、古典文献の購入などは遠くに追いやられることになる。

こうして例えば、マーシャルの『経済学原理』は初版はあるものの、重要な版とされている2版も5版もないということになる。もっとも、近年はリプリントや著作集が大量に出るようになっており、経済の図書室でも、予算の許す範囲でできるだけ揃えようとしている。しかし、これらで間に合わせば十分かというそうではない。研究に校訂版の全集は不可欠だが、校訂版は編者の研究成果が(バイアスとともに)盛られることになるから、オリジナルとは違ったテキストとなる。したがって、つねにオリジナル、各版に遡れることが研究には必要である。

今では経済学を中心とするゴールドスミス・クレス文庫(学者としては地味な仕事しかしなかったロンドン大学のフォックスウェルが生涯をかけて収集した最高に価値のあるコレクションであることはよく知られている)のマイクロフィルムがある(附属図書館所蔵)ので、原典研究はずいぶんしやすくなった。しかし、フィルムがあれば原本は要らないというわけでもない。オリジナルは容易に通覧ができる。他の機能をフィルムや電子情報に奪われるとしても、書物の通覧性は最大の強みとして残るであろう。古典的文献の初版や第二版など各版にはその姿において歴史性が刻まれており、それも重要な情報である。また優れた書物には物としての、さらに言えば文化財としての確かな手応えもある。世界の耐久性を構築する「仕事」(アレント)の産物としての書物にわたしたちはもっと自覚的であったほうがよいのかもしれない。文化財としての書物を強調するのは骨董趣味に接近するかにみえるのかもしれないし、場合によっては邪道かもしれないが、しかし、電子

情報の軽快さ、簡便さは必ずしもそれをオールマイティにするわけではないことは強調されてよいだろう。書物はオリジナルで読むにこしたことはない。もっとも、例えば、今では数百万円とも評価される『リヴァイアサン』を初版で読みたいとは思わない。しかし、クォート版の立派な初版は、たまに参照したいときはあるし、したがって必要に応じて参照できることは、研究には重要なことである。

ところで、社会学や人類学がドイツやフランスで発展したとすれば、経済学はとりわけ英米で発展した。したがって経済学部の蔵書は英米の書物が多数を占めている。しかし、多数ある英米の書物についても古典的文献はこういう事情だから、フランスとドイツの経済学の古典的文献はいっそう弱いように思われる。

それだけではなく、戦後から70年代までに出た洋書の収集状態は、一部のジャンルを除くときわめて惨澹たるもののように思われる。どうしてこの欠落を埋めればよいのか、頭が痛い。

限りある図書費だから、何もかもに強い図書室を作ることは不可能である。しかし、継続的に上の欠落を埋める努力をしないかぎり、やがて来る学部100周年に、さらに大きな宿題を残すことになりかねない。せめて20年後には代表的な古典については網羅的に収集しておきたいというのが、関係者の願いである。そこで、経済学部では古典文献収集費を予算化してもらうことにした(ただし、それがいつまで認められるかは定かではない)。教官と図書室職員が協力し合って、できるだけ効率よく古典文献を収集しようと考えている。その手段としてインターネットが大いに役に立ちそうである。

戦後の洋書も多くはインターネットで簡単に見つけることができる。問題はそれをいかに効率的に購入できるかである。個人が行っているように、図書室あるいは部局と海外の古書店とが直接に取り引きができないものだろうか。これにはリスクも伴うし、出入りの業者の仕事を奪うというマイナスはあるのだが、限られた

資金をできるだけ有効に使いたいという思いも断ちがたいものがある。よい方法を是非考えて欲しいものである。

わたし個人は18世紀のイギリスの、とりわけスコットランドの思想史を研究しているので、古典文献として強いのはその時代のものであるが、18世紀の古典文献は今では多くがマイクロフィルムになっているので、手間さえかければ、多くは国内で読めるようになった。また自らも当面の研究に必要なものは25年ほどかけて、買い集めたので、基本的にはそれを読めばいいし、図書館に依存する比重は小さくなっている。そうなったのは図書館を方々訪ね歩いてコピーをすることも、なかなかの労であって、労で疲れた一方、案外本を集めようとすれば集まるということを知ったからに過ぎない。まだ古書は市場に存在するし、往年に比しての近年の円高が強い味方になってくれている。昔は古書はいわずもがな、洋書は高価であった。

古典的なものはフィルムしか許されないことが多かったし、コピーもフィルムも研究には使えても、たまってくると使い勝手が悪い。しかも、関心が他に移ったら、まったくのゴミでしかない。ただし、18世紀研究で辛いのは、相手が古書だから単価が高いことである。35ポンドの新刊は高いが、100ポンドの古書は安いと思うのは、18世紀研究者の悲しい習性かもしれない。

偉大な思想家や学者には蔵書家も多い。とはいえ、凡庸な学者と比べてどうかはわからない。18世紀の哲学者スミスやチュルゴの蔵書は有名である。文学者スコット（スコットランドのボーダーに近いアボッツフォードのスコットの寓居の蔵書は目を見晴らせるものである）も、また19世紀末の大学者アクトンも図書館には依存しなかったというが、ヒュームやマルクスのように図書館で仕事した人も多い。現代では、研究者は基本的に自分の蔵書だけでは研究できない。まして自前のライブラリを持たない若い研究者にとっては図書館の蔵書が研究を大きく左

右する（その程度はフィールドやテーマによって違うとは言えようが）。

そして、そもそも文献収集というものは限りが無いし、研究は継承されなければならないから、どうしても大学の図書室の蔵書を充実させることが必要である。古書は図書館に入れたら終わりだ（鹿島茂）という見解もあり、それにも一理ありそうだが、しかし、貴重な書物は一人が独占するより、多数が利用するほうがよいだろう。

先にも述べたように、古典文献には歴史を経てきた文化財としての魅力がある。わたしは文部省在外研究員として英国に滞在した時に、中古車で疾駆して、各地のブックフェアを梯子して回ったことがある。有名なヘイ・オン・ワイには行かなかった（エディンバラ大学のディキンソン教授が行くほどのことはないと言いつめたのだが、未練はある）が、エディンバラ、ヨーク、オクスフォード、ロンドンのフェアでは沢山の古書に出会った。また旅先では必ず古書店を覗くことにした。こうして、貴重な古書を多数手に入れることができたが、17、18世紀の古書となると、モロッコ皮装の美本の場合、相当高価である。しかし、ちょっと無理すれば買えないものではない。そうしたとき、「これは英国の文化財である。それをわたしは買って帰ろうとしているのだが、英国に置いておく方がよいのではないか」と何度も躊躇うことがあった。お金を払って買うのだから、何もやましいことはないのだが、魅力ある書物というものはそういう感慨をもたらすもののようである。新しく出来る新棟の図書室には貴重書室が設けられる予定である。ハーバード大学のクレス文庫のような読書室は無理でも、そこでじっくり古典文献を熟読できるようなレイアウトのものに仕上がって欲しいものだ。バインド部分が壊れないように、120度しか本を開けられない書見台も設けて欲しい。

（たなか ひでお）

『お伽草子 物語の玉手箱』展に触れて

文学研究科美学美術史学専修 市川 彰

去る平成11年11月24日より翌月7日の14日間にわたって、京都大学附属図書館において京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会『お伽草子 物語の玉手箱』展が開催されました。京都大学が所蔵する貴重なお伽草子が数多く展示されており、展覧会名称の副題に示されていたとおり、まさに「玉手箱」を開いた感を抱いた人は少なくなかったことでしょう。その「玉手箱」のなかには、物語だけではなく色とりどりの絵もふんだんに納められていました。物語＝お伽草子に関しては展覧会図録の解説にすでに簡明に説かれていますので、ここでは絵の話、とくにお伽草子とは切っても切れない関係にある奈良絵本とその鑑賞をめぐって、少しばかり思ったことを述べてみたいと思います。

奈良絵本とは、より広義には、いわゆるお伽草子を主として幸若・物語・謡曲などをその内容とする室町時代末期から江戸時代にかけて制作された絵入写本や絵巻物のことを指し示す言葉です。この奈良絵本は、名だたる絵師に依頼・注文して制作された誂え物ではなく、いわゆる出来合の既製品でした。その制作・販売の担い手は、京都や奈良、堺などの都市において中・近世に成立した絵画生産業者である絵屋であったようです。また、滝沢馬琴は『燕石雜志』において、お伽草子の絵巻物にふれて「書肆のしいれ画」と記していますから、職人的絵師を抱えた本屋もまた奈良絵本の生産者として想定することができるでしょう。

ここで奈良絵本という名称についても触れておかねばなりません。実のところ、その由来は明確なものではありません。魚澄惣五郎は『古社寺の研究』において、奈良・猿沢池の近くに絵屋町が存在していたことを指摘しています。そして、春日絵所など、いにしえには南都の社寺に属していた絵師たちが、時代の推移とともに

その帰属を離れて職業的町人として生計を立て、ついにはお伽草子などの絵をも手がけるようになり、奈良絵本の職人が形成されたのであろう、と推定しています。そして、この見解がほぼ定説として広く認知され、『広辞苑』などの多くの辞書類にも記されるようになったのです。

しかしながら、奈良絵本を奈良という土地において製作された絵本と見ることは少々難しいと思われ、今日では否定的な見解が多いようです。というのは、それ以後の研究によって奈良絵本という名称が近代、明治の中頃以降になってから作られた言葉であることが明らかにされており、明治42年の『文芸百科全書』がその初出とされているからなのです。このことからすると、特定の土地の名産品としての名称、たとえば京友禅や奈良晒のような言葉と同じ感覚で捉えてはならないようです。もちろんのこと、奈良に存在した絵屋もまた、奈良絵本の生産者としての条件を備えていたことは確かであるでしょう。ですが、現存する奈良絵本が制作された土地は奈良に限られることなく、たとえば京都などにおいても生産されていたのです。むしろ京都の方が生産量は多かったのかも知れません。とするならば、やはり奈良絵本という名付けに関しては、通説とは異なった事情を想定する必要があるように思われます。

ところで、奈良絵本に描かれた絵はどのように映るのでしょうか。私たちは徳川美術館や五島美術館に所蔵される大和絵絵巻の代表作である《源氏物語絵巻》など、日本美術史に燦然と輝く名品たちの洗練の極みを尽くした美しさに対し、陶醉に似た感覚を覚えてしまいます。しかし残念なことに、奈良絵本に対しては同様の想いを抱くことはないようです。展示されていた奈良絵本に対し、その美しさに心の奥底から感銘した人は少なかったのではないのでしょうか。そ

のような価値判断の表れでもあるでしょう、奈良絵本の造形的特質を形容する言葉として「稚拙」「下手」「素朴」といったものがしばしば見受けられます。また、奈良物や奈良刀といった言葉が、第一級の品ではない、価値の一段低いものを指し示していることは広く知られるところです。少々うがった見方をするならば、一級品ではない絵を奈良絵と呼び、それが通称として定着してしまったというような、奈良に思い入れを抱く方々にとっては悲しい状況が有ったのかもしれないと意地悪く想像してしまうのは私一人だけではなく、多くの人が想うところでしょう。

名付けの事情に対しての憶測はこれぐらいにして、次に奈良絵本がどのように鑑賞されていたのかについて想像をたくましくすることにしましょう。

奈良絵本が取り上げる主たる内容がお伽草子であることもあって、目で読み、声に出し、耳に聞き、そして絵を見、とその鑑賞はとても楽しいものであったことと想像されます。一人で楽しむのもよし、複数の人が一冊をとともに楽しむのもよし、といった具合だったのでしょう。そして物語の内容とともに、その場면을視覚的に表した絵を眼にすると、物語の世界はより豊かなふくらみをもってイメージされていたと思われます。ここで私たちは物語と絵画の幸せな結びつきの一例を目の当たりにしているのです。

さらに付け加えるならば、奈良絵本に書かれる漢字交りの平仮名文が行間を広くとって、比較的読みやすい流麗な文字で書されていることにも留意しておきたいものです。奈良絵本の絵の裏には、その絵を挿入する箇所を示す番号などが記されているものもあるそうですから、絵と詞書は別々の職人が担当したと考えられています。奈良絵本の鑑賞者たちは物語の内容もさることながら、頁をめくるとに立ち現れる、組み合わせられた書と絵の競演をも楽しんでいただこう。

また奈良絵本の形態は、時代の推移による変化もあってでしょう、横本・縦本・大型縦本な

どとさまざまですが、その多くが金泥で秋草などの文様が描かれた表紙を持ち、そのうえに朱の題箋が貼られ、また見返しには金銀箔が置かれるなど、他の書物と比べてもとても美しく装訂されています。このような奈良絵本は、公家や武家、上層町人などの婦女子の婚礼にあたって、祝儀用の贈答本、婚礼時の棚飾本としても用いられていたところから、嫁入本という別称を持っています。数冊で一揃いをなしていた奈良絵本が嫁入り道具のひとつとして、蒔絵などによってきらびやかに装飾された書棚や書見台のうえを飾っていた状態を想像することは楽しいことです。考えてみれば当然のことですが、奈良絵本は頁を開いて読むためのものとしてだけではなく、頁を閉じた状態にあっても室内を飾る道具としても機能していたことがうかがわれるのです。

ここで少々、もどかしい現実が思い起こされてしまいます。私たちは「玉手箱」の中身に手を伸ばすことは許されません。愛らしい奈良絵本を簡単には手にして読むことも、室内に飾ることもできません。当時の鑑賞者たちがそうしたように、書見台の上に置き、あるいは膝のうえに、畳の上に置いて奈良絵本を楽しむことができないのが現実です。当然のことですが、展示ケースのなかに納められている状態は、奈良絵本のもともとの鑑賞形態ではありません。奈良絵本が後世に伝えていくべき先人からの貴重な遺産であるがゆえに致し方のない面は十分に考慮されなければならないでしょう。しかしながら、実際に手にとって次の頁を繰ってみたいという想いに駆られるのもまた人情というものです。

そのようなわがままな人情を考慮してでしょう、展示会場では電子展示が試みられていました。もちろんのこと、解像度の問題、指先で頁を繰っていくことと、マウスをクリックすることなど、埋めることのできない溝は多々あります。しかしながら、それを望むすべての人が触れることが許されない以上、仮想現実であるにせよ、電子展示という方法は奈良絵本を鑑賞す

るうえで非常に有効な代替手段であることは確実であると思われ、もどかしさは少しばかり解消されたのでした。

以上、奈良絵本とその鑑賞をめぐって雑駁な見解を述べてきました。奈良絵本への関心は近時ますます深まりつつあり、国際会議が開催さ

れたり、研究書の出版も行われています。さらなる研究の充実が望まれているなか、『お伽草子 物語の玉手箱』展が催されたことは、意欲的な展示が試みられたことも含め、非常に意義深いことと思われました。

(いちかわ あきら)

京都大学図書館百年

思い出すままに - 1972(昭和47)年の経済学部図書室の移転

内 藤 昭 子

昨年は附属図書館も創立100周年だったが経済学部もまた創設80周年を迎え、その記念として出版された『京都大学経済学部八十年史』を見せていただき早速めくったのはやはり「図書室」の頁だった。京都大学在職中に在籍させて頂いた



赤レンガ作りの旧研究棟
(現在は法経北館が建つ)
(昭和46年春)

部局にはそれぞれ独自の様々な思い出があるが、経済学部図書室にもまた大きな思い出がある。

今、八十年史を開きながら経済学部図書室の、特に書庫の移転の一端を思い出すままに綴らせて頂こう。1971(昭和46)年4月1日付で経済学部閲覧掛長を承り、翌年には図書室等の移転作業があることは聞いてはいたが、実情を知りこの移転をチャンスに、何としても解決しなければならない大きな問題が幾つもあることに驚いている余裕もなく、早速移転にむけての準備計画に取り組んだのだった。

新しい建物は旧館の跡地に建てられたため、

事実上、旧館書庫部分以外の解体 新館建設 第1回図書移転 旧館残部解体 新館完成 第2回図書移転というように、図書は建設途中と完成後の2回に分けて移転しなければならなかった。

1972(昭和47)年1月5日から約40日の予定で開始された第1回移転時にはまだエレベーターは運転できず、しかしその時に移転の図書は新書庫の5層等に配架予定であったため、コンテナに詰められクレーンで5層のベランダまで吊り上げて運び込むという、きっと余り例がないであろう方法がとられたのだった。



クレーンでコンテナを吊り上げての図書移転

第1回目の移転は予定通り無事終了、そして息つく暇もなく第2回目の準備に入った。準備計画の段階で皆が一番頭を悩ましたのは、第1書庫の約60%を占めていた和書の配列が、他の図書館（室）の図書の配列とは逆の右から左に向けて並んでいたことで、この機会を逃せばもう配列を左から右に変更できるチャンスはなかなか訪れないであろうと思うと、超難題であってもやり遂げなければならなかった。しかし、計画立案中には「経済学部図書室の和書は右から配列」と、それもこの図書室の特色として良いのではないかと等、もう投げ出したいと思ったこともあった。でも、気持ちを取り直し、どのようにすれば配列を変更することができるか図書室職員皆で何度か集まり考え、また実際に書庫で実験を行ってもみた。その結果配列を変更できる方法は2つあること、しかし何れも旧書庫から搬出時を第1段階として綿密な準備の上で新書庫に運び入れ、第2段階として新書庫に配列された図書を再調整することにより、図書の配列は全て左から右に変更できることがわかり、この問題について解決できる見通しがついた。

その次の問題は、経済学部の図書は第1回移転分を省き5箇所分散されているだけでなく、各書庫に全部門の図書が収められていたこと、更に和書について国内のものを「一般」等と区別され書架も別になっていたため、利用者が検索時に惑わされる様子も見受け、これも此の際一本化する必要性を考えると、1つの書庫ずつ片付けてゆく方法での移転の場合、新書庫でどのように配列すればこの様々な問題を抱えた図書をそれぞれの箇所にもとめられるか、第2回移転計画の立案は本当に頭が痛かった。

これらの難問を無事に乗り切る方法として、運搬の業者によく理解しておいて頂くだけでなく、図書室の全職員で当番を決め時に応じて業者に適切なアドバイスができるような体勢をとっておく必要があり、当番の職員は翌日の作業

箇所を前日にみて問題点を確認しておくこと等、皆で細部に渡ってまで打ち合わせを行った。

7月16日より旧図書室は休室し、8月1日からいよいよ第2回目の図書の移転開始、業者の方々も事情を良く理解して下さり作業は順調に進み、予定通り9月末には全図書の移転は終わった。その最後の作業終了後、運搬を担当して下さった日本通運の責任者から「分かり易く気持ちよく仕事が出来ました」といって下さった時には思わず涙が出る程嬉しかった。



法経本館にあった旧経済学部閲覧事務室

でも、経済ではまだ配列を左から右の方法に変更する作業も含め、様々な問題を持っていて搬入されている総ての図書を一本化して指定の書架に配列する、つまり第2段階といえる作業が進んでいた。これ等の作業も終わり事実上書庫の移転を完了できたのは10月16日の新館における閲覧室開室の前日だった。

最後に、大変な難問が幾つもあり実に難しかった移転を、何の問題もなく無事終了できたのは、共に頑張り信念ともいえるような気持ちで事に当たって下さった、当時の経済学部図書室の皆様のお蔭と、この場をお借りして限りない感謝の気持ちをお伝えさせて頂き、筆を置かせて頂く。

（ないとう あきこ
：元経済学部図書室閲覧掛長）

写真は当時の法学部会計掛長鷲田清一氏が撮影。

青年海外協力隊に司書として参加して

総合人間学部図書館閲覧掛 佐野 広明

1. はじめに

「井戸掘りに行かれるのですか？」青年海外協力隊(以下「協力隊」)への参加が決定したとき、周りの方からよくそう聞かれました。確かに協力隊に対する一般的なイメージはそういうものかもしれません。しかし、実際には様々な活動形態・内容があります。協力隊が1965年に発足して以来、これまでに2万人以上の隊員が派遣されてきました。つまり、2万人の隊員がいたら、2万通りもの活動内容があるのです。私は、1997年7月からの2年間、協力隊の司書隊員としてハンガリーで活動してきました。以下では、一隊員として私が体験したことを紹介したいと思います。

2. 応募から合格まで

協力隊は、春秋の年2回募集されます。私が応募したのは、平成8年度の秋募集でした。実はこれ以前にも協力隊を受験したことがありましたが、現職参加が認められずに辞退したことがあるのです。

現職参加とは、すでに企業や官公庁などに在籍している人が所属先に身分を残したまま協力隊に参加することです。一般職の国家公務員の場合、派遣法と呼ばれる「国際機関等に派遣される一般職の公務員の処遇等に関する法律」(昭和45年法律第117号)が適用されます。私の場合、関係者の方々のご尽力により、幸運にも現職で参加することができました。

平成8年度秋募集での司書の要請は、ハンガリーのほかニカラグアとフィジーからありました。私は現職参加を希望していましたので、大学図書館との関わりがあるハンガリーからの要請を希望しました。選考には一次と二次があり、前者は筆記試験、後者は面接と健康診断です。

久しぶりに受ける筆記試験や面接を何とか乗り切り、最終合格発表の日、ついに「派遣隊次：平成9年第1次隊、派遣予定国：ハンガリー」と書かれた合格通知を受け取ることができました。同時に、あと1ヶ月後に迫った派遣前訓練に向けて忙しい日々を過ごすことになったのです。

3. 派遣前訓練

1997年4月からの約80日間、東京の広尾にある協力隊の訓練所で派遣前訓練を受けました。この派遣前訓練が終了するまでは、正式な隊員ではなく「隊員候補生」なのです。

訓練内容は、語学が中心になります。ハンガリーに派遣される総勢9名の候補生は2クラスに分かれてハンガリー語(マジャール語ともいいます)を勉強しました。ハンガリーでは、「名前の日」といってそれぞれの名前を祝う日が決まっていますが、我々はそれぞれの誕生日をもとにハンガリー名をつけました。ちなみに私の名は「アルフレッド」。今でも協力隊仲間が集まると、ティナとかフローラなどと呼ばれる人があるので、周りから見たら非常にあやしい集団かもしれません。

訓練では語学のほかに、国際協力についての講義や障害者施設でのボランティアなどがありました。中には本当に役立つのかと疑問に思うようなものもありましたが、同年代(実際には幅がありますが)でしかも同じ目的を持つ人たちとの合宿生活は楽しいものでした。

訓練が終わり晴れて「隊員」となるわけですが、いよいよ派遣というとき不思議と不安は少なかったように思います。むしろ、新しい生活に対するワクワクとした期待感のほうが大きかったのを憶えています。

4. ハンガリーについて

ウィーンからの飛行機でハンガリーの首都ブダペストに到着したとき、「色の暗い国だな」というのがハンガリーに対する第一印象でした。しかし、その印象もすぐに「渋い」というように良いほうに修正されました。ブダペストの中心街では、日本人が思い描くような古き良きヨーロッパなるものが色濃く残されていると思います。一方、団地などの集合住宅が多い地域を見ると、社会主義時代を思わせます。



ブダペスト

一般に協力隊は、発展途上国と呼ばれる国々に派遣されます。しかしハンガリーは、決して発展途上国ではありません。ですから、派遣される職種も日本語教師やスポーツ関係など、技術協力というよりは文化交流的なものがほとんどです。

ハンガリー人に関してですが、少なくとも私の周りの人たちは陽気で親切でした。そのため一般的にそういうものかと思っていました。しかし、油断していると道を歩いていてアジア人ということでからかわれたりして、不意打ちをくらうこともありました。

実は、ハンガリーに派遣されることが決まるまでこの国がどこにあるか正確な場所も知りませんでした。1996年にアトランタオリンピックが開催されましたが、サッカーの予選リーグで日本と同じグループになった国くらいの意識しかありませんでした。そして、実際住んでみればかなりその国についてわかるはずだと思っていました。ところが、私の場合、2年間滞在してもハンガリーについてうまく語ることはでき

ません。帰国後9ヶ月近く経った今、ますますそう感じるようになってきました。それはどの国についても同じことだと思います。ですから、ハンガリーに興味を持たれた方は、もし機会がありましたら実際にハンガリーを訪れてください。そしてそれぞれの感性でこの国の雰囲気を感じとってみてください。

5. 司書としての活動

私の活動場所は、デブレツェンというハンガリー第2の都市にあるコシュート・ラヨシュ大学でした。ここからの要請は、寄贈された約6,000冊の日本語図書を整理し、日本語図書室の体制を整えてほしい、というものでした。協力隊の司書といっても様々な活動内容がありますが、今回のように日本語図書室の整備・運営といった日本語教育や日本研究に特化した要請が最近出されつつあります。配属先は最も関係のありそうな大学図書館ではなく、人文学部の一般応用言語学科でした。というのも、この学科では1995年から協力隊の日本語教師による日本語コースが開講されており、寄贈された図書もこの学科が管理することになっていたからです。しかし、まだ学生たちは日本語図書を活用するまでの能力を身に付けていませんので、図書室としての業務よりは寄贈された図書の目録作成や装備が活動の中心となりました。



コシュート・ラヨシュ大学

大学中央図書館との最初の話し合いで、日本語図書室の蔵書についても目録は中央図書館のシステムに入力することになりました。中央図書館では、アメリカの図書館システムを導入しています。ですので、目録のフォーマットはUSMARC(現在は、CAN/MARCと統合されて

MARC 21になっている)のものを採用しています。また、分類表はUDC(国際十進分類法)、件名標目はLCSH(米国議会図書館件名標目表)、そして目録規則はハンガリー独自の国家規格を採用しています。UDCはハンガリーでは一般的に採用されているらしく、デブレツェンの公共図書館でも使われていました。



大学中央図書館 玄関

日本語図書室は、中央図書館がある大学のメインキャンパスから離れた建物の中にあり、学内LANは整備されていませんでした(現在は別キャンパスに移転し、LANも整備されています)。ですので、中央図書館のシステムをオンラインで使用することはできません。どうしたものかと思案したのですが、結局は日本語図書室ではスタンドアロンのパソコンを使って目録データを作成し、それをフロッピーディスクで移行するということになりました。しかし実際に目録データを作成しようとすると、様々な問題を解決しなければなりませんでした。USMARCフォーマットにおいて日本語をどう扱うのか、ローマナイズの方法や分ち書きはどうするのか、また、USMARCフォーマットにはどのように変換するのか、などです。中央図書館の司書の方から貸していただいた資料をもとに、これらの方針を決めていきました。

目録データ作成の技術的方法としては、悩んだ末にSGMLという枠組を利用することになりました。エディタでマーク付けの目録データを作成した後、SGMLパーサによってデータの検証を行ないます。そして、パーサの出力したESIS形式ファイルを、スクリプト言語により

USMARCフォーマットへと変換するという方法です。参照するDTD(文書型定義)はUSMARC用のものを独自に作成しました。また、SGMLに関して調査する過程でインターネットを通じて多くの情報が得られましたので、このときほどインターネットの重要性を強く認識したことはありませんでした。

2年間の活動の結果、図書室の蔵書約6,000冊のうち3,000冊ほどのデータ入力が終わったに過ぎませんでしたので、目録作成およびその他の整備を後任の司書隊員に引き継ぐことにしました。今後この図書室が発展し、コシュート・ラヨシュ大学における日本語学習や日本研究に欠かせない存在になればと思っています。

6. おわりに

外国において日本語図書室の整備に関わる、ということは非常に貴重な体験でした。特に、最初から活動期間が2年間で決められていたこと、そして、業務のかなりの部分を自ら方向付けできたという2つの点でそう感じます。今回の派遣は既存の海外研修派遣と異なり、先進諸国の図書館を視察し調査するというものではありませんでした。しかし、協力するために派遣されたとはいっても、実際には学ぶことのほうが多かったように思います。これは別に司書隊員だけではなく、ほかの多くの帰国隊員がそう感じていることでしょう。

この文章を読んで、協力隊やハンガリーという国に興味を持たれた方がいらっしゃいましたら幸いです。そして更に、協力隊に参加してみようかと考える方が多く出てくることを期待しています。

最後になりましたが、協力隊参加への過程で、また、ハンガリー滞在中においても励まし応援してくださった多くの方々に「ケセナム セーベン!」(ハンガリー語で「どうもありがとうございます」)と感謝いたします。

(さの ひろあき)

文学部図書室紹介

シリーズ「京都大学図書室巡り」



文学部の図書室は1997年度に建った文学部新館の地下一階にあります。図書室（館）が地下

にあるのは図書館建築としては比較的珍しいものです。比較的珍しいものではありませんが、決して今までにまったくない構造というわけでもありません。たとえば、2002年度開館予定の国立国会図書館関西館（仮称）の建物も、そのほとんどが地下におかれる設計になっています。

新館ができる以前は、文学部・史学部・哲学部の三つに分かれていました。1992年の2月、ある新聞社系の週刊誌に「知識の棺桶：大学図書館」という見出しの記事が掲載されました。そこでは、文学部の書庫が収蔵能力を超えて収納しているのに、震度4程度の地震で書庫の床が抜ける可能性がある。また、雨漏りもはなはだしいため貴重な図書が水浸しで損壊する可能性がある。このため、収容能力を超えた10万冊の図書をダンボール箱に梱包し、学内某所に積み上げて利用できなくしていると紹介されました。この記事が、現在の新館建築に影響をあたえたものかどうか分かりませんが、関係する人のなかには頭が痛いといっている人もいたとか聞きました。

新館の完成とともに、三つを統合して現在の図書室となりました。閲覧席は約100席、書庫は地下1、2階にあり収容能力は68万冊あります。現在の蔵書冊数は約82万冊ですので、計算上はすでに書庫は満杯ということになります。実際には、貸出中の図書もたくさんあり後5～6年くらいは大丈夫だろうということです。せっかくの新館も、10年ももたないのではちょっと情け

ない話ではあります。

文学部の始まりは、1906（明治39）年の京都帝国大学文科大学の開設に遡ります。以来94年間の長い年月をかけての資料収集の結果、文学部では貴重な資料をたくさん所蔵しています。その中には文庫という形のコレクションもありますし、必ずしも文庫という形でまとめたものでないものもあります。現在、文庫と呼ばれているものは30あります。この中には、哲学の西田幾多郎、画家の須田国太郎など一般にも広く名前の知られた人の旧蔵資料も文庫となっています。

その文庫の中に、1916（大正5）年から1934（昭和9）年まで文学部英語学英文学講座の外国



人教師であった Edward Bramwell Clarke氏の旧蔵図書もあります。このクラーク氏は1874（明治7）年に横浜で生まれ、英国ケンブリッジ大学を卒業後、

1897（明治30）年慶應義塾の語学教師として再来日しています。この時、慶應の学生にラグビーを教えたのですが、これが日本のラグビーの始まりだとされています。

現在、文学部ではカード目録を、OPACで検索できるようにコンピュータに入力しています。本年度の事業ではこのクラーク文庫の目録などを電子化しています。簡体字の図書も、国立情報学研究所のシステムが対応できるように更新されましたので、今後は中国書もコンピュータで検索できるようになってゆくでしょう。

（文学部整理掛長 渡 邊 誠）

京都大学図書館外部評価報告について

附属図書館創立百周年を記念して行われた、京都大学図書館の自己評価、外部評価の報告書が3月に完成しました。

報告書は、第1部：大阪市立大学学術情報総合センター所長石原武政教授、東北福祉大学附属図書館長及川三千男教授、京都府立図書館長小山雄一氏、立命館大学総合情報センター郷端清人次長、三重大学附属図書館長柴田正美教授、図書館情報大学永田治樹教授による外部評価、第2部：附属図書館をはじめ各部局、研究所の図書館・室の現状と課題、第3部：利用者アンケートの報告、そして、資料編となっています。タイトルにあるように、京都大学図書館の現状と将来への展望を示す²⁴⁷頁の膨大な報告書であり、今後の京都大学図書館にとって、示唆に富んだ内容となっています。この評価を受けて、職員間でも、「利用者アンケート、自己評価（現状と課題）、外部評価で改革に向かう機運ができつつあるのではないかな。各評価委員の6つのレポートは改革の焦点を定めるのに非常に有力である。」などの意見がだされています。

評価内容（要旨）

1．先進性について

(1) 京都大学電子図書館システム。業務のコンピュータ化。(2) 土曜、日曜開館。(3) 全学共通科目「情報探索入門」(4) ホームページによる広報活動。(5) 商議会メンバーによる書店での選書（学生の希望を先取りする意味で意義深い）。

2．「調整された分散方式」について

(1) 分散主義は一概に否定すべき事ではないだろう。歴史、規模を考えると、一つのあり方として評価するが、内実を伴っていない。(2) 調整のための、全学的な意思決定を行う機関が明確にされていない。(3) 中・小規模の図書室が連携なしに個々に運営されている状況。

3．機能分担について

(1) 附属図書館は学習支援。部局図書館・室は研究支援。

4．管理について

(1) 図書館経費確保の努力を。(2) 図書収集方針の明確化。学生用図書選定基準の作成。(3) 予算の一定割合を司書が選定する制度を。(4) 京大内資源共有と分担収集。(5) 電子的資料の将来性は高いが、旧来の資料の必要性にも気を配る必要がある。(6) 選書・発注・受入・予算管理・目録・装備・製本の徹底した合理化・効率化を。(7) 管理、運営の効率化は京都大学図書館システムの利用者へのサービス充実という方向を見失ってはならない。(8) 単純に一元化・統合化を目指すのではなく、一元化・統合化でどれだけのサービスが向上できるかについての合意を得る必要がある。(9) 図書館活動の広報が重要。(10) 遡及入力促進。(11) 新たな時代に対応した情報の選書・収集・蓄積・発信、電子図書館システムの開発・維持・管理。(12) 新たな図書館機能に対応できる人材の育成。

5．サービスについて

(1) 共同利用体制の確立。教官層への理解を求める努力(2) デリバリーシステムの整備。(3) ユーザーの声を聞くシステム。『静脩』の活用。(4) 全学共通の利用証を。(5) ショート・ローン。(6) 利用頻度の高い資料の複本購入。(7) デジタル情報を駆使した学術サービスやレファレンスを。(8) 附属図書館と部局図書館・室のサービスには相当の温度差が存在。専門図書館（部局）の機能を担うに足る知識・経験を蓄積できるだけの環境が整備されていない。担当職員の定着性の確保。(9) 職員の能力不足に対する人事異動による不慣れ。

6．運営について

(1) 全学図書館システムのあり方を検討する機

関の設置。(2) 調整機関の設置。(3) 部局図書室の機能分担と連携・調整を実現するための組織の一元化。(4) 機能別に大胆な図書館の再編成を。思い切った組織改革を。(5) 部分的な統合・合併にむけて検討を。(6) 部局図書室の管理運営について附属図書館の基本方針の表明を。(7) 附属図書館と部局図書室を一体にした図書系組織の発足。(8) 小規模図書室の統合(専門分野、立地条件の近接ごとに)。(9) 外部

資金の導入。(10) 業務の一部のアウトソーシング。

7. 施設について

(1) デポジット・ライブラリーの設置。(2) 逐次刊行物集中管理センター。

(3) 書誌作成業務の集中処理センター。

8. その他

(1) 地域における図書館界の連携。

附属図書館資料紹介

沢山の寄贈図書が書架に並びます - 片田文庫について -

平成11年9月6日、再生医科学研究所の永田和宏教授から、附属図書館の熊谷事務部長に「故片田 清氏の蔵書を寄贈したい」との電話があり、同時に膨大な量の蔵書目録が送られてきました。

我々は、附属図書館の書庫はすでに満杯に近く、まとまった形で寄贈を受けるのは困難という考えを持っていましたが、約1万4千冊の蔵書目録や、直接故片田氏宅に伺い蔵書を見せて頂いた瞬間「上品な書店」という感じがし、蔵書内容から「絶対京都大学の宝になる」と判断しました。その後、附属図書館で検討した結果、寄贈を受ける。将来は分散配架するにしても、当面は「片田文庫」として一括して開架書架に置き、多くの利用者の皆さんに読んで頂こうと判断いたしました。

その蔵書はすべて全集物で、多くのジャンル(宗教関係の図書は無い)を網羅し、現在手に入れようとしても不可能なものがありますし、古書として高価で販売されているものも沢山あり、初版本が多く見られました。現在も継続して出版されている新しい全集もあります。

寄贈の際、何回も広島から駆けつけ大変な尽力をくださった、従兄弟の片田欣也氏によると、片田 清氏が亡くなったのを知った書店

が、段ボール箱に入った全集を数箱、慌てて配達にきた。その全集物もすでに代金は支払っていた。というエピソードもあります。

現代日本文学全集 増補決定版 143冊。吉川英治全集 114冊。など文学関係のほか、政治、思想から芸術、長谷川町子全集まであります。

故片田 清氏は、昭和28年に本学文学部仏文をご卒業され、その後、京都、大阪の高校で教鞭をとられ、平成10年12月31日に急逝されました。身寄りの方が無かったために、教え子である永田教授が、前々から片田氏が愛着を持っていた京都大学への寄贈を斡旋してくださったものです。

附属図書館で、通常1年間に購入する図書数を遙かに超える寄贈を受けたことになり、大変な作業量に達しますが、故人や、寄贈にかかわってくださった方々のご意向を一刻も早く利用者の方々に伝えるべく整理作業を行っています。

これらの蔵書が附属図書館2階の書架に並べられると、雰囲気が一変すると思います。

夏頃には皆様の目に触れるべく努力していますので是非来館されご利用頂きたいと思います。なお、この蔵書の寄贈にご援助頂いた、故片田清氏の従兄弟にあたる片田欣也氏、永田和宏教授、相続財産管理人の山下勝生氏に心より感謝いたします。

教官寄贈図書一覧（平成11年11月～平成12年3月）

身 分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
名誉教授	高寺貞男	複雑系の会計学	三發書房	1995
名誉教授	高寺貞男	利益会計システムの進化	昭和堂	1999
名誉教授	林巳奈夫	中國殷同時代の武器	朋友書店	1999
教授	上林開彦	Cooperative Databases and Applications '99	Springer	1999
名誉教授	萩原 宏	二十世紀 洲漢詩精選	世界図書出版	1998
教授	田中秀夫	啓蒙と改革	名古屋大学出版会	1999
名誉教授	佐道 健	雅びの木	海青社	1999
名誉教授	青山秀夫	青山秀夫著作集 （故人 遺族より寄贈）	創文社	1999
館長	菊池光造	田中一村の彼方へ	三一書房	1997
館長	菊池光造	第10回記念 創工会展	創工会	1998
教授	坂口守彦	魚博士が教える魚のおいしさの秘密	はまの出版	1999
総長	長尾 真	中国国情と世相	研文出版	1999
総長	長尾 真	Asian Research Trends	東洋文庫	1999
総長	長尾 真	Directory of Chinese Studies in Japan	東洋文庫	1999
総長	長尾 真	Chronicle of the Kingdom of Ayutthaya	東洋文庫	1999
総長	長尾 真	国際高等研究所 こうとうけん	〈財〉国際高等研究所	1999
総長	長尾 真	国際高等研究所 15年のあゆみ	〈財〉国際高等研究所	1999
名誉教授	小葉田淳	思い出の道	思文閣出版	1999
名誉教授	本庄 巖	Language Viewed from the Brain	karger	1999
教授	石川光庸	オランダ語誌	現代書館	1999
助教授	川崎 靖	オランダ語誌	現代書館	1999
総長	長尾 真	Bibliotheca Codicum Asiaticorum 10	東洋文庫	1996
総長	長尾 真	Optical Character Recognition	John Wiley	1999

教官寄贈図書一覧（平成11年11月～平成12年3月）

身 分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
総長	長尾 真	Learning Multidimensional Signal Processing	LINKOPING Univ.	1998
総長	長尾 真	西暦2050年の日本人へのメッセージ	日東印刷	2000
総長	長尾 真	HTML 詳説	共立出版	1999
総長	長尾 真	2n+1進法はコロンブスの卵	心地産業	1999
教授	横山俊夫	"Idealism, Protest, and the Tale of Genji"	OXFORD Univ. Press	1999
教授	狹間直樹	共同研究 梁啓超	みすず書房	1999
教授	酒井英昭	数理工学のすすめ	現代数学社	2000
総長	長尾 真	稲盛財団京都賞年本1997・1998	(財)稲盛財団	1999
総長	長尾 真	白浜試験地を利用して行われた試験研究1948-1998	農学部附属演習林	2000
名誉教授	田口義弘	詩集 遙日点	小沢書店	1999
名誉教授	田口義弘	我と汝・対話	みすず書房	1999
助手	三浦 研	老人保健施設関係法令通知集 平成10年度版	中央法規出版	1998
教授	木田章義	菊日辞書	隋川書店	1999
教授	四日谷敬子	感覚とロゴス	晃洋書房	2000
名誉教授	小林昭一	波動解析と境界要素法	京大学術出版会	2000
教授	徳永宗雄	The Brihaddevata	隋川書店	1997
名誉教授	吉田次郎	トーマス・マンを読む	吉田次郎	2000
教授	荒牧典俊	北朝隨唐 中国仏教思想史	法蔵館	2000
教授	八田夏夫	熱の流れ	森北出版	1997
教授	八田夏夫	板圧延	コロナ社	1997
教授	八田夏夫	流れの計算	森北出版	1996
教授	八田夏夫	数値計算法の基礎と応用	森北出版	1998
教授	八田夏夫	基礎流体力学 '98	恒星社厚生閣	1998

..... 図書館の動き

宇治地区に附属図書館分館スタート

宇治地区の五研究所共通図書室は、平成12年4月1日から附属図書館宇治分館として新たにスタートしました。

今年は、五研究所図書室が発足して30周年の節目にあたり、分館に発展することで、将来に向けた展望を見いだしていきます。

分館では、宇治地区共通図書室を創設した精神を継承して、宙空電波科学研究センター、工学研究科、エネルギー科学研究科、情報学研究科、さらに自然科学系の関係機関へと、全学的な観点から研究支援を強化すべく作業を進めています。

中国書のデータ入力開始

平成12年度文部省大学図書館関係予算の図書館機能高度化経費に、総合目録構築経費が新規計上され、本学に約1200万円が分配されました。これは、中国語図書のデータ入力のための経費であり、今年度から附属図書館、文学部、人文科学研究所等で入力作業をする予定です。

名称変更のお知らせ(平成12年4月1日付)

(学外) 学術情報センター 国立情報学研究所

(学内) 人文科学研究所附属東洋学文献センター 人文科学研究所附属漢字情報研究センター

目 次

経済学部の古典文献に思う	1
『お伽草子 物語の玉手箱』展に触れて	4
京都大学図書館百年	
思い出すままに 1972(昭和47)年の経済学部図書室の移転	6
青年海外協力隊に司書として参加して	8
文学部図書室紹介	11
京都大学図書館外部評価報告について	12
附属図書館資料紹介	
沢山の寄贈図書が書架に並びます 片田文庫について	13
教官寄贈図書一覧	14
図書館の動き	16

編集後記

21世紀に向けて、大学全体が大変な年になりそうです。図書館にとっても、いよいよ、大きな波が押し寄せてくるでしょう。昨年の外部評価から図書館組織の問題をはじめ、学術資料とサービス、特に電子ジャーナルの問題など具体的に考えなければならない時期にきています。また、今年は京都大学で電子図書館国際会議も予定されています。ますます、図書館活動の広報が重要になってきました。(G)